



第 58 回 - 縄文時代 その 1 -

この夏は八ヶ岳山麓で数日間過ごす機会があった。八ヶ岳連峰は現在の山梨県北杜市、長野県南牧村、小海町、佐久穂町、佐久市、立科町、茅野市、富士見町、原村にまたがり、赤岳（2899m）を最高峰として、南北約21kmにわたる堂々たる山容を誇っている。

この山塊は日本列島を東西に分断するフォッサ・マグナ(大地溝帯)の中央に生じた火山帯である。南端の編笠山、権現岳を越え、主峰赤岳の山頂に立つと、北に延びる主稜が見渡せる。東の佐久側には、硫黄岳の爆裂火口跡や、大規模な山体崩壊を起こした天狗岳、稲子岳など、荒々しい台地の営みが分かる。やがて主稜は、現在国道の通る麦草峠付近から比較的なだらかな様相を見せるが、爆裂火口に水が溜まった雨池、さらに高見石や北横岳に広がる溶岩など、火山活動の痕跡を無数に留めている。八ヶ岳の最北端は、美しい円錐形火山の蓼科山であるが、その更に西にはやはり火山である霧ヶ峰が続く。

八ヶ岳西南麓には、縄文文化を展示する3つの施設―八ヶ岳美術館（原村歴史民俗資料館）、井戸尻考古館、北杜市考古資料館―がある。今年は「縄文人が意識した数」が共通テーマであった。2つの穴で表現する眼、3本の指で表す蛙、4つの突起が表す神。縄文人が表したかった数、意識した数、その奥に潜む数の意味はどうであったのか、土器の突起の数を縄文人はどのように意識していたのか。土器を作り始めた草創期～早期の前半ころまでは口縁部は直線で、器面全面に縄文・捺糸文などを施す物が多く、割り付けなどの数の意識は薄かった。早期の後半頃から4単位の波状口縁や器面を割り付けるような土器が出現、その後、縄文時代を通じて4単位や6単位の割り付けが多く見られるようになった、など縄文人の数の意識についての大変興味ある展示が行われていた。

その縄文時代より遙か昔、約50,000年前にアフリカ大陸を旅立った人類（ホモ・サピエンス）はおおよそ38,000年前には日本列島に足を踏み入れていた。オオツノジカやナウマンゾウが歩き回っている寒冷な気候であった頃、人々はまだ土器や弓矢を知らず、獲物を求めて遊動生活を送っていた。研究者はこの時代を石器時代と名付けている。この時代の狩りの道具として重用されたのは黒曜石であった。火山活動により生み出された黒く光り輝く天然のガラスである。狩人たちは黒曜石で槍を作り、更にそれを各地に運んでいた。八ヶ岳周辺は黒曜石を産出するため、旧石器時代における重要な場所だったのである。

時が流れおおよそ15,000年前から日本列島の各地で土器が使われるようになった。その土器は縄を押しつけたような文様を特長とするところから縄文土器と名付けられた。この12,000年以上続く縄文土器の時代は縄文時代と呼ばれることになった。人々は堅穴住居を中心としたムラをつくり、定住的な生活を行うようになった。信州では八ヶ岳周辺を中心としておおよそ5,500～4,500年前に縄文文化の頂点を迎えた。多数の絢爛豪華な土器や、国宝に指定された縄文のビーナスなどがこの地において発掘されており、博物館・資料館などで鑑賞することが可能である。

日本列島の縄文土器は、その古さ、出土数の多さ、形式の多様さなどで世界に類例が無いものである。実際縄文文化の研究は土器を中心に進められてきた、すなわち放射性炭素年代測定法が確立する以前は、土器の出土した地域や地層、土器の形などによって時代の前後関係がさだめられ、縄文文化の中での位置づけが明らかにされてきたのである。土器とは「粘土を800度前後の低い温度で野焼きした器」をいう。製作には窯を用いない、轆轤を使わず手ごねや積み上げる手作業によること、釉薬を掛けない素焼きであること、多孔質で水漏れ、空気漏れがすることなどの特色がある。これらの特色は土器の文化度の低さを示すものではない。土器よりも焼成温度の高い硬質の陶磁器が製作されるようになってからも土器の製作は依然として続けられてきた。

土器の用途は、水の運搬、食物の貯蔵、神様の供物、墓の副葬品などいろいろだが、縄文土器は当初から尖頭の深鉢が多かったことを見ても分かるように食物の煮炊き用が中心であった。爆弾形をした深鉢の底を炉の灰に突き刺し、回りで火をたいてとろ火で食物を煮るのである。そうしてドングリのアクを抜き、根や茎などを食べやすくし、魚や獣肉の腐敗を防ぎ、各種材料の味を調合して食材の範囲を飛躍的に広げた。そして人々は移動生活に別れを告げ、定住生活に入ることができたのであった。土器は縄文人の生命といっても良い大発明であった。陶器や磁器は直接火にかけるとすぐ割れてしまうが、土器は水も空気も通す多孔質のせいで、耐熱性があり簡単には割れない。縄文土器の真骨頂である。又、その通気性や通水性によって表面の水分が気化し、土器内の食物を冷涼に保つことができる。「天日で自然乾燥させたアサリをビニール袋に

入れておくと半年たてば変色してカビがついたが、土器に入れたものは5年経っても食べられた」という実験報告（縄文生活の再現）もある。縄文料理のメインディッシュは魚や野菜の煮物であり、それが日本料理の根幹として繋がって、料理人は煮物ができれば一人前と云われるところへいくのであろう。こうした土器の利便性は、縄文時代に陶磁器の技術が入ってきても縄文人が土器を手放さなかった理由であり、それが今日でも日本人の鍋料理好きへとつながっているであろう。

「縄文」と云う名称は、エドワード・S・モース（東京帝国大学・理学部・動物学教授）が1877年（明治10年）に大森貝塚から発掘した土器をCord Marked Potteryと報告したことから、その訳語が「縄文土器」として定着した。明治から昭和の初期においては、縄文時代とそれに続く弥生時代は石器時代として一括されてきた。登呂遺跡や岩宿遺跡などの発掘による考古学的成果から縄文と弥生が「縄文式文化」、「弥生式文化」に分離認識できることから区分が確立した。日本の歴史における時代区分として縄文・弥生が確立したのは1960年代以降であり、そして現在に至っている。その後も発掘調査による成果とその理解の仕方、そして世相によって、縄文時代のイメージは様々に変化してきたが、それがそれぞれ時代の教科書に反映され、たとえば親と子では教えられた内容が違うという事がある。

縄文時代の研究者は、長いこの時代を大きく6つ（草創期、早期、前期、中期、後期、晩期）に分けて考えることが多い。初出した縄文土器は約15,000年前の物とされているが、縄文時代は約1万3千年前～1万年前から草創期が始まり、その初め頃は日本列島が大陸から離れる直前であったと推測されている。草創期の気候は、数百年で寒冷期と温暖期が入替わる、急激な変化の厳しい時期であった。やがて、温暖化が始まり氷河が溶けて海水面が上昇、海が陸地に進入する「海進」が始まる。早期の約10,000～7,000年前には日本列島は完全に大陸から離れて島国となっていた。気候の温暖化と共に亜寒帯性の針葉樹林は後退し、東日本にはブナやナラなどの落葉広葉樹が、西日本ではシイなどの照葉樹が広がるようになった。気候の変化は植物相に影響を与えただけでなく、動物にも変化をもたらした。マンモス・ナウマン象など大型動物は温暖化が進むにつれて少なくなり、かわりにイノシシやニホンジカといった中小型獣が増えていき、狩猟道具として弓矢が急速に普及した。また海が侵入してできた海岸地帯に貝塚が作られるようになった。数個の堅穴住居で一集落を構成すること、またドングリやクルミなどの堅果類を食料資源として植林栽培する初歩的農法が始まった。縄文・擦糸文の尖底土器が作られて、煮炊き用として使われるようになった。縄文前期は今から約7,000年前から5,500年前である。この頃気候の温暖化で海面が上昇、縄文海進（海水面が4～5メートル高くなる）のため、現在は内陸部にあたるところに貝塚が作られている。

信州の縄文時代黄金期は縄文中期、5,500年前から約1,000年間続いたと考えられる。考古学者戸沢光則（元明治大学学長）は縄文時代の中に3つの特徴的な地域文化をあげた。一つは縄文後期を中心に関東地方の海岸に発達した「貝塚文化」、もう一つは遮光器土偶などで有名な縄文晩期、東北地方の「亀ヶ岡文化」。そして、残りの一つが信州の縄文中期の文化である。八ヶ岳を中心とした地域では、前後の時期と比べてずば抜けて多い遺跡の数と、国宝「縄文のビーナス」や重要文化財「藤内遺跡の土器」など、数々の傑作出土品を誇っている。

この特色ある文化は、最初に土器が名付けられた神奈川県（の遺跡の名をとって「勝坂文化」とも呼ばれるが、戸沢は信州の縄文中期の遺跡遺物の研究を讀んで、「井戸尻文化」と呼ぶことを提唱した。研究者により、その範囲や呼び名は異なるが、おおむね関東西部から山梨・長野を一つの文化圏と考える者は多い。それが井戸尻文化圏である。八ヶ岳西南麓から霧ヶ峰の南麓に掛けての地域は縄文遺跡の宝庫であると言えるくらい、縄文人の生活のあとが数多く残されている。ここには、大小の河川で区切られた台地がいくつも並んでいた。標高900～800m前後では湧水も多く、そこにいくつもの村が作られた。特に大きなムラは何軒かの家が台地の中央をぐるりと囲む「環状集落」というかたちを何世代かで築き、約1,000年の間に100軒以上の家を残す事もあった。この地域の縄文中期の遺跡数は300を超え、まさに縄文時代の一大拠点だったのである。

縄文の生活スタイルが大きく代わるきっかけは稲作の伝来である。大陸・朝鮮半島から水田稲作技術をもった人々がやってきて、縄文人と混ざり合いながら次の弥生時代が始まる。それがおよそ2,500年前である。なお、稲作を行わなかった北海道や沖縄では、本州、四国、九州とは違う文化が発展していく。

（岡野 実）

文献 信州の縄文時代が実は凄かったという本 藤森英二 信濃毎日新聞社（2017）